国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（８）

劉　玲

本稿は、中田祝夫編抄物大系（勉強社 1977 年）所収の、国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』（影印本）を底本として使用する。当該抄物の成立、資料的価値については、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注（１）」（筑波大学人文社会研究科『筑波日本語研究』第 17 号）を参照されたい。本稿では、前記拙稿、及び「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注（２）」（同 18 号）、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注（３）」（同 19 号）、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注（４）」（同 20 号）、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注（５）」（同 21 号）、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注（６）」（同 22 号）と国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注（７）」（同 23 号）引き続き、主として、抄中に引かれた漢籍及び集成している五山僧の諸家に注目し、それをできる限り明記して、本抄物を解読する際の手がかりになるようつとめる。なお、翻刻・校注上の諸事項については、前記の諸稿に詳しいが、要点また前記の諸稿において説明していない事項について記しておく。

一　翻刻の範囲を底本の二四四頁から二六一頁とする。

一　基本的に、原典テキストが写された方形の枠線の後に置かれている抄文の部分を翻刻の対象とする。若干、その枠線内及び枠線外の周辺に書き込まれた小文字書きの抄文が存在するが、影印本で判読しにくい箇所が多いため、本稿では翻刻しない。

一　漢籍の引用が見られる場合、その書名または篇目名や章・節の名、作者名に ═══ 線で記す。例えば、「長信秋詞　唐詩正音有王少伯長信秋詞二首……」（二四五 6）、「趙曰　昨題格　主旧國越絶書曰　大城即闔閭之所築……々在峴山　盖以西施得名見于方輿二」（二五〇 1）、「李白清平調　一枝紅-艶露凝香」（二六〇 20）、「禅月詩露滴紅蘭玉満畦」（二四八 9）など。少数、漢籍の本文が引かれているが、書名または作者名などの情報はいっさい記載していないと見られる場合がある。このような場合について、今回、一々原本で確認するに至っていな

いが、『国学宝典』網絡版（http://www.gxbd.com/）、「中央研究院漢籍電子文獻瀚典全文檢索系統」（http://hanji.sinica.edu.tw/）、『中国基本古籍庫』（黄山書社出版）を検索資料として、これらの資料にほぼ同様な本文が検索できた場合に、「雪樵本曰　鷓鴣自呼其名　常向日而飛　々数随月……」（二五七1）のように、引用の最初の部分に‖で記す。また、【　】内において関連の情報を補うことがある。なお、書名などの記し方については、拙稿「『三体詩幻雲抄』を通してみる室町時代における漢籍流布の状況」（筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』55号）において検討しており、参照されたい。

一　前記の検索資料と本抄物の引用と比較して、文字や行文の上相違する箇所が見られる。例えば、「……生海西川谷　及海南城郭垣下」（二五五7）については『国学宝典』（味古斎重校刻本・明李時珍『本草網目』草部第十二巻）において「汝南」とあり、「然間翅之始　必先南翥」（二五七3）については『国学宝典』（筆記本小説大観本・宋李昉『太平廣記』巻46禽鳥二）において「開翅」とあるように、相違が見られる。なお、これらのうち、誤記や誤植だろうところがありうるが、当時に引かれる漢籍の底本がまだ明からにしていないため、今回特に改めず、底本の通りに翻刻する。

一　幻雲抄に集成している五山僧の諸家の説については、次のように――線で記す。例えば、「補云　題注　共養之　共字　供也　蓋供養之義也」（二四五7）においては「題注……女官也」は「補云」（横川景三の説）である。また、「観中　聴雨ノ点ハ　恣風吹ニテ――也……」（二六〇10）については、「恣風吹ニテ――也」より以降はおそれらく「観中」（観中中諦の説）において「聴雨」（心田清播の説）が引かれていると見られるような箇所について、「観中」並びに「聴雨」の両方に―線を引く。ほかに、「或云　此□覧呉王之旧跡　感而作也」（二四九9）とあるように、「或云」は誰の説か不明だが、同じく――線を引く。

一　漢字については、底本の形態を重んじ、異体（略体・俗体を含む）の文字をできるかぎりそのまま写し、また、末尾の表1にまとめる。例えば、【臺（台）】（二四四4）や【灵（霊）】（二五〇3）」など。また、□で示し、【　】内において【「米*凵」（幽）】（二四八7）、【「虐*戈」（戯）】（二五一11）、【「旡+舛」（舞）】（二四七16）、【「木+冖+友」（愛）】（二四九5）・【「言*云+冉」（講）】（二五六3）のように示す場合がある。*符号はその字または偏旁冠脚を左右でまたは内外で組

み合わせた文字を、+符号はその字または偏旁冠脚を上下で組み合わせた文字を意味する。これらについて、初出以降はすべて通行体に改め、また、末尾の表２にその通行体をまとめる。その他、「才子傳第二」（二四五９）・「図経本草云」（二五五６）などのように、工夫しても再現できない場合は通行体のみで記すが、一々説明せず、末尾の表３にまとめる。

一　小文字で二行書きにしてある箇所が少数あり、「／」印で改行を示す。例えば、「……而大幸　師古蛾／与俄同　為徒仔　云々」（二四五11）とあるのは、「与」字から改行している。

一　仮名については、「シカ子テ」を「シカネテ」（二五一１）に、「イマ井マシク」を「イマイマシク」（二五四５）に改めず、底本通りに写す。合字では、「〆」を「シテ」に、「「」を「コト」に改める。例えば、「可帰トシテアルソ」（二五六16）、「思コト」（二五一４）、「入　コト　」（二五六12）など。

一　踊り字については、漢字一つと仮名一つの場合は、底本に従い、それぞれは「々」と「ゝ」で写す。例えば、「云々」（二四四７）、「哥々」（二五四１）、「採香径ナントゝ」（二四九14）、「カゝル」（二五三12）など。仮名二つ以上の場合または漢字仮名まじり書きで二つ以上の場合は、「／＼」を使い、「ヤス／＼ト」（二四六３）、「ヒトナミ／＼ニ　女伴ニ　随テ」（二五二11）、「夫ハ帰ル欤／＼待トモ」（二五四４）のように写す。

一　振り仮名はそのまま写す。

一　濁点はそのまま写す。

一　返り点、一・二点と上・中・下点は、[レ]、[一]、[上]などのように[　]に入れて記す。

一　転倒符、挿入符、書入れ指示については再現できず、【　】内において説明する。

一　見せ消については■で示し、【　】内において説明することがある。

一　その他

・　頁数は底本のそれに従い、漢数字で記す。また、あらたにアラビア数字で行数を記す。

・　句読点は特につけず、底本の朱点により一文字分をあけることとする。なお、破損や墨汚れ、または不鮮明であるため、判明できない場合に、校注者の判断による。

・　破損や墨汚れ、または不鮮明であるため、判読できない場合に、□で示す。推測されるものがあれば、それを□の中に入れる。

・　その他の説明事項があれば、【　】内において記す。

二四四

1　長信　養按　王應麟　玉海一百五五十　漢　長樂宮長信宮　東方朔傳　武帝微行　賚五日糧　會朝長信【この行まで数行間「長信秋詞」原典テキストが置かれている】【「五」「五」間に挿入符あり、「十」右傍に転倒符ある。「一百五十五」にすべき】【傳（伝）】【會（会）】

2　宮　注　太后之宮也　注　漢表有長信少府　注　太后所居宮名也　居長信　則曰長信少府　居長楽　則曰長樂少府

3　漢儀曰　帝祖母称長信　帝母称長樂　後曰永樂宮　黄図　長樂宮　本秦之興樂宮也　高祖始居櫟陽【「漢」「儀」間に挿入符あり、右傍に「宮」。「漢宮儀」にすべき】【「信」「帝」間に挿入符あり、右傍に「宮」。「長信宮」にすべき】【「樂」「後」間に挿入符あり、右傍に「宮」。「長樂宮」にすべき】

4　七年　長樂宮成　徙居長安城　三輔旧事　宮殿疏　皆曰　興樂宮　秦始皇造　漢修飾之　云々　有鴻臺臨【臺（台）】

5　華殿　温室殿　長信宮　長秋　永壽　永寧□四殿　高帝始居此宮　後太后常居之　長安志【華（華）】【□「サ+寺」（等）】

二四五

1　史記曰　始皇二十七年　作長信宮　又成帝母王皇后居長信宮　班婕妤賦　求共養於東宮兮　託長信之

2　末流　恵帝自未央朝長■樂　武帝曰　東朝　廷辨之七国反　景往来東宮　謀於太后　則長樂多【「信」字見せ消】【「景」「往」間に挿入符あり、右傍に「帝」。「景帝往来」にすべき】【往（往）】

3　為母后所居矣　水経曰　殿西有長信　長秋　永壽　永昌等殿　則長信　長秋　皆在長樂宮也　長

4　樂者　高帝既以為居　又以□朝　無異於正宮矣　後人主皆居未央　而長樂常奉母后【□木+冖+又（受）】

5　長信秋詞　唐詩正音　有王少伯長信秋詞二首　一首此詩也　共作暫次一首云　真成薄命久尋思　□見【十+田+冖+夕（夢）】

6　君王覓後疑　火照西宮知夜飲　分明複道奉□時　幻謂可知成帝在西京　倢伃在東宮　又考漢書外【□「目+心」（恩）】【京（京）】

7　戚傳　倢伃処東宮也　補云　題注　共養之　共字　供也　蓋供養之義也　倢伃　女官也　幻按　左傳　文元

8　年　穀也　食　子　注食子　奉祭祀共養者也　云々共乃供也　左傳注　作共多也

9　此蒲昌齢迁校書郎後　貶竜標尉　此時作也　述己与君相隔之意矣　昌齢傳見才子傳第二【「貶」右傍より書き込

み「以不護細行」とある。「以不護細行　貶竜標尉」にすべき】【蕭（篇）】

10　注　倢伃賦　云々　幻按　文選無之　按漢書外戚傳下巻　孝成班倢伃　帝初即位　選入後宮　始為少使

蛾（ニワカニ）

11　而大幸師古蛾／与俄同　為倢伃　云々　其後　趙飛燕姉弟　亦従自微賤興　渝越礼制　□（ヤウヤク）盛於前　班倢伃及許皇后【□「穴+浸」（寝）】

12　皆失寵　稀復進見　鴻嘉三年　趙飛燕譖告許皇后班倢伃挾媚道　祝詛後宮　詈及主上　許皇后

13　坐廢　考問班倢伃　對曰　妾□死生有命　富貴在天脩正尚未蒙福　為邪欲以何望　使鬼神有知　不受【廢（廃）】【□「門*夕」（聞）】【冨（富）】

14　不臣之愬　如其無知　愬之何益　故不為也　上善其對　憐閔之　賜黄金百斤　趙氏姉弟驕妬　倢伃　15　恐久見危　求共養太后長信宮　上許焉　倢伃退処東宮　作賦自傷悼　其辞曰　云々　奉共養

16　于東宮兮　託長信之末流　共洒掃於帷幄兮　永終死以為期　云々　師古曰　末流　謂恩顧之末也　一曰

17　流　謂等列也　共　音居用反　養　音弋向反　幻謂長信乃東宮也　想非太子宮乎

18　篋笥――□曰　篋笥　盛扇之箱　選題作怨歌行

19　注　昭儀　村云　女官ノ随分　アカリタル官也　続翠云　注　宝仗ハ　列班スル処也　幻謂　宝仗字　契于澗泉説　雖然　天隠【翠（翠）】

20　注所引　言長信洒掃也　幻謂　澗泉以金殿為視朝之殿　天隠以金殿為長信宮

二四六

1　続翠云　宮女□衰者　居長信也　奉帚　字ハ　ミヤツカイスル事ヲ　ヤカテ　云タ　何曲モ　ナキ皃也　夜カ　アクレハ　ミカウシヲ【皃（貌）】【□「冖+竜」（寵）】

2　アクル也　且　字ハ　何叟ニテモ　アレ　一段ト云テソレニ　重テ　又餘叟ヲ　ハ　□ニ　且字ヲ　カイタソ　蓋言　帚与扇共徘徊　不進【餘（余）】【叟（事）】【□「日*寸」（時）】

3　不退皃　玉顔――奉帚平明シタレハ　日出テ　カツカト　シタソ　鴉ハ　昭陽殿ヘ　ヤス／＼ト　飛上テ　帯日朝トモ　吾ハ【「帯」「日」間に挿入符あり、「朝」右傍に転倒符ある。「帯朝日」にすべき】【帶（帯）】

4　日ヲ　サエ　不得帯也　日ハ　天子之象也　謂昌齢有才不用也　淵云　注作宝仗　可也　第二句言　奉帚雖掃塵耳【淵（淵）】

5 猶未去也

6 村云 長信ハ 女院ノ 御座アル処也 婕妤モ 成帝母女 女院御 ソハニ イテ 可洒掃ト云ソ 奉帚――婕妤ハ

7 賢女也 不［レ］思ニ 成帝ノ母ニ 洒掃シテ イタソ 秋扇ト 同□ニ 我モ 被弃テ 居長信也 且将團扇ヨム 可也【□「木*羨」（様）】【弃（棄）】【團（団）】

8 将字与字ノ訓也 婕妤不及寒鴉帶昭陽日影也 村云昭陽ノ殿（トノ）ト 文選ニ 讀也【讀（読）】

9 雪本曰 奉帚云々 旧注 趙澗泉説 此詩為宮中怨女之作也 怨而不怒 有風人之義 天色平明 奉帚掃殿

10 金殿已開 天子将視朝 且将團扇暫徘徊 私心覬望■一見其容皃 ■蒙寵幸 所以徘徊窺【「■一」、某字見せ消、右傍に「万」。「万一」にすべき】【「■蒙」、「哉」某字見せ消、右傍に「或」。「或蒙寵幸」にすべき】

11 視 不忍去 望幸而不得 遂自嘆曰 寒鴉飛集昭陽屋上 猶帶得日影来 我乃平生不得一到

12 昭陽 近天子之清光 是我玉顔不及寒鴉色也 云々見于古本注 或云 澗泉□非矣 婕妤在金殿開【□「角*半」（解）】

13 処 共天子之侍従 窺視寵幸 不忍去 却有玉顔不及寒鴉之嘆也欤 愚亦拠斯解 何則張御史此【「張御史」右傍に「楷」。「張楷」を指す意】【欤（歟）】

14 和云 水殿芙蓉映日開 翠幃香冷独徘徊 無端錦樹□蕭索 疑是昭陽促召来 盖第一句言昭【□「士+巴」（声）】

15 陽 第二句言長信也

16 補云 奉帚―― 一二句 古人解 誤也 古人解云平明ノ ウチアカシニ 昭陽ノ アサマツリコトスル時ニ 我モ 衆女ト共ニ

17 人ナミ／＼ニ 洒掃スル也 此解大非也 一二之句健伃居［二］長信宮［一］ 以［レ］扇洒-掃 扇与［レ］我能-相-似也 マダカナシイ処ヲハ 不［二］云出（シテ）［一］

18 也 第三句ニテ 一二之句ニ 心中クイ／＼ト 思タ処ヲ ウチフテ、 云出ス也 玉其顔者 不［レ］及［二］鴉色［一］ 柰之何 寒字映［二］【柰（奈）】

19 玉字［一］ 美人顔色雖［二］暖 如（シテ）［一］［レ］玉不［レ］及［二］寒鴉［一］也 寒鴉 就暖者也 故帶日影 言杜詩 丈人屋上鳥 人好鳥亦好之

20 謂也 胡三省通鑑 寒鴉有一類 続翠咲之 只言［二］鴉影寒［一］耳

21 桃云 第二句 且字 苟且ノ心 可也 更ニ 本意テハ ナケレトモ 苟モ 且ツ カウシテ 送［二］日月［一］也 共徘徊ト云モ 昨日得［レ］寵 居

二四七

1 衆女之上［一］ 今日失［レ］寵 共［レ］衆女徘徊也 云々 注 奉共養――桃云 注ノ心ハ 太子ノ宮ニモ ミヤツカウト ミエタソ 或謂奉（ウケタマワル）［二］共

2 養（ヲ）于東宮［一］分トモ 可［レ］訓乎 東宮ハ 成帝 乎 言奉［二］成帝命［一］ 共ニ奉（ス）［二］太后（ヲ） 於長信（ニ）

［一］也 雖然此義非也 倢伃東

3 宮也 養謂 桃東宮之解 不可乎 東宮 謂長信宮 非謂太子也 其義見于後 幻謂 此羨不可用之【「羨」左傍に「義与（欤）」。「此義不可用之」にすべき意】

4 □云 註 飛――立為皇后――絶幸（セラル）――此註ニテ 見レハ 言［二］飛燕［一］欤 其ナラハ 飛燕奪寵譖我 為［二］皇后［一］トモ イモトノ【□「木+兆」（桃）】

5 趙昭儀ニ 寵ヲ 移サレテ 昭陽ノ鴉色ニハ 不［レ］ 及モノカナト 可［レ］見欤 是ハ 愚カ義 不［レ］足 ［レ］取 サレトモ 詩人之設［レ］意ハ 又

6 カウモ 可見ソ 其時ハ 玉顔字モ ミヨイソ 我ト 玉顔ト 云マイテハ ナケレトモソ 桃云 共徘徊 或 謂 長信与東宮 故

7 有共字 幻謂 非也 養謂 幻義可也 直指（シテ）［二］ 長信（ヲ）［一］作［二］東宮［一］也

8 幻按 唐詩正音 李端 長信宮 金壷漏尽禁門開 飛 燕昭陽侍寝回 随分獨眠秋殿裏 遥聞語笑自【獨（独）】

9 天来 蓋昌齢詩三四句 亦言［三］婕伃羨［二］飛燕 ［一］也 桃謂［二］趙昭儀［一］非也 幻又謂 此詩全 篇 ■菴 補菴義 可也【「林」某字見せ消、右傍に「村」。「村菴」にすべき】

10 幻謂 秋ニ思（ハ）在團扇寒鴉字也 日影 爭文類聚后 集四十四 李義府始召見 太宗令詠鳥 云 日影颺（アク）［二］ 朝

11 彩（ヲ）［一］ 琴中聞夜啼 上林多少樹 不借一枝棲 帝曰 吾将全樹借汝 豈惟一枝本傳 幻謂 昭陽日影 用 李

12 義府詩 排韵 多少 作無限 太宗 唐太宗也 且将云々 村云 婕伃以扇比身吾也 雪本【「比」「身」 間に挿入符あり、「吾」右傍に転倒符ある。「以扇比吾身」 にすべき】【韵（韻）】

13　北礀墨梅詩　玉容弗及寒鴉色　故托緇塵異漢宮

14　陳羽　才子傳五曰　羽　江東人　貞元八年　礼部侍郎　陸贄下第二人登科　与韓愈王涯等【「才子傳……与韓愈王涯等」は次の「呉城覧古」詩作者陳羽に関する抄文で、二四八2に同文のものが見える】

15　雪本曰　又王昌齢長信秋思詩云　金井梧桐秋葉黄　珠簾不捲夜来霜　薫籠玉椀無消息　臥聴南宮清漏長【臥（臥）】

16　樵本曰　趙嘏長信宮詩　君恩已尽欲何帰　猶有残香在□衣　自恨身軽不如燕　春来長遶御簾飛　三四意同【□「旡+舛」（舞）】

17　和云　香薫綉□錦屏開　供奉笙歌及早回　可恨檐前鸚鵡語　驚残好□却空来　子安【「綉□」、□「巾*莫」（幕）】【「好□」、□「ヒ+夕」（夢）】

二四八

1　呉城覧古　越絶書曰　呉大城　云々　心象八卦　城中有水城十二里　呉以都　云々【この行まで数行間「呉城覧古」原典テキストが置かれている】

2　羽　才子傳五曰　羽　江東人　貞元八年　礼部侍郎　陸贄下第二人登科　与韓愈王涯等

3　詩言　呉王全盛日　与西施遊宴之地　今已荒廢　空有烟水耳　香径――言昔日求香種於南蛮

4　植之於径　今無其人　空有蘭葉也

5　蘭葉紅　埤雅云　青苔秋而紫　々蘭至秋而紅　江文通別賦　見ル　［一］紅蘭之受タルヲ　［一］［レ］露　翰曰　蘭至秋色

6　紅也　望ハ　［一］青楸之離アヘル　［一］［レ］霜ニ

7　太平廣記十三四　雲嬌羞而掩面蔽身　雖紅蘭之隠映□谷　不足比其芳麗也　李白惜春賦　水【□「米*凵」（幽）】

8　蕩漾分碧色　蘭葳蕤分紅芳　注　士贇　江淹賦云々　才子傳　褚載詩云　西風昨夜墜紅蘭　一宿郵亭

9　叟万般　禅月詩　露滴紅蘭玉満畦

10　□云　蘭葉ハ　葉ヲ紅ト云ハ　不審ナト　云ヘトモ千葉蓮花ト云モ　葉ノ事テハナイソ　花ヲ　云也　蘭ノ花ノ葉々ノ叟也

11　愚按　埤雅　云々　至秋而紅ト云ヘハ　紅字面白ソ蘭ノ始カラ　紅ナル物テハナイソ　言ハ　秋ニナリテ紅ニナルマテ　衰ヘ

12　ハテヽ　アルト云ヘハ　感アルソ　其マテモナイ只花ナレハ　紅ト云マテソ　黙義　蘭葉之葉　与桃同黙又曰　蘭至秋而紅

13　此詩曰　■色　何也　只言径有蘭耳　■紅字無意幻謂　依李白惜餘春賦　則春蘭亦紅也　又刘禹錫【「■

色」、某字見せ消、右傍に「春」。「春色」にすべき】【「■紅」、「経」某字見せ消】【刘（劉）】

14 題灵岩寺詩云　香径白開蘭葉紅

15 続翠　呉王――玄宗惑貴妃失国ト　見ヘタ　乍去自然作也　無人字　面白シ　■貴妃ト　云ハヌハカリ也【「遺」某字見せ消】

16 春色ハ　昔ヨリ　春色也　サレトモ　心カアルヤラン　此地ニ　先發也　是ハ　無情ノ　物ニ　情ヲ　云イツケタソ【發（発）】

二四九

1 渊云　春色――人ハ　不憐ソ　春色ハカリハ　カワユク　思テ　憐欤　呉王歌舞セシ地ニ　春草早生也　先字ハ　言春草必生

2 廢処也　發ハ　草ノ發生也　作［二］開字訓［一］　不可也　杜詩　當春先發生之謂也　發字　村義　亦同渊村云　發【當（当）】

3 字作［二］開之訓［一］　不可也　香径ノ　蘭葉ノ　上ヘモ　香草ヘモ　先ツ　ヲトツレテ　春意發ー動也

4 桃云　春色――年々　第一□ニ　先ツ　蘭花カ　發（ヒラク）也　桃云　春色――只春色ノミ　昔呉王夫差カ　西施ヲ【□「米+田」（番）】

5 □シテ　歌舞セシ地ヲ　憐ヤラウ　西施ヲ　置タシ舘娃宮ニ　年々　第一番ニ　先ツ　蘭花カ　發ヤウワト云心也【□「木+冖+友」（愛）】

6 樵本曰　呉王夫差代越　々与范蠡謀滅呉　進美人西ー施於呉王　与西施宴於姑蘇臺上　為越所滅　羅隠西施詩云【「代」右下に「伐」。「伐越」にすべき】【范（範）】

7 家國興亡自有時　呉人何若怨西施　々々若解傾呉國越國亡来又是誰【國（国）】

8 樵本曰　碎事云　蘭葉尖長　有花紅色白　俗呼為燕尾香　煮水浴療風

9 覧古　或云　此□覧呉王之旧跡　感而作也　文選廿一巻　詠史部　盧子諒覧古詩註　済曰　徐廣　晋紀曰　諶善属【□「言*乏」（「譏」か）】【廿（二十）】

10 文　西晋之末　天下喪乱　北投刘琨　々以為從事■中郎　後為段匹磾別駕　嘗覧史籍　至藺相如傳　覩其【「事」見せ消】【從（従）】【覩（睹）】【嘗（嘗）】

11 志　思其人　故詠之　養私案　盧諶　字子諒

12 呉城――村云　春秋戦國ノ時ノ　呉也　今ノ陳州也蘇州モ　呉ノ跡也　覧［レ］古（テ）　歎スル詩也　呉王在世時ハ　サシモ

13 イカメシカリシ　呉王ノ時ハ　トコモ　カシコモノヽメイタリシカ　今ハ　其旧迹サヘ　アルナシニテ

只アル物トテハ　水烟空マテ也　呉国ハ

14　水國也　又西施カ　採香径ナントヽ　云モ　今ハ其人ハ　蘭葉自紅也　此呉城邊ハ　春モ　旧ハ　サシモサヽメク処ノ　歌舞ノ　地ナルカ

15　今モ　凄凉タルヲ　憐テ　年々不忘　此香径ナントノ　蘭葉ノ上ヘ　香草トモヘ　先ツ　ヲトツレテ　春意カ　舘娃宮ヘ　發-【凉（涼）】

16　動スル也　發字ハ　發（ハツ）スト　読ヘキ也　ラクト云ハ非也　採香径ノ事ハ　蘇州志ニ　詳也　又曰　香径ニハ如（キ）［一］蘭薏［一］　香屮【「也」「ラ」間に挿入符あり、右傍に「ヒ」。「ヒラク」にすべき】【屮（草）】

17　ノ類ヲ　栽ル欤

18　呉王――言昔与西施遊宴之姑蘇　今尽荒廢　只空有水烟耳　旡其人　故云空也　香径――言南蛮ヨリ覓【旡（無）】【覓（覓）】

19　香種　栽之　此地□西施遊宴　添-植以［一］芝蘭［一］今雖旡其人　紅而如［レ］古也　見者感慨深　春色――春色亦与【□「推+乃」（携）】

20　人共似［レ］怜［一］旧跡［一］　如何ナレハ　年々先此宮ニ　花-發也　三四句 八 承 蘭葉紅也　年々先發――江曰　以此句（ヲ）

21　二（ノ）句ワ　蘭花ト　見ヘタソト

二五〇

1　趙曰　昕題 格 主旧國越絶書曰　大城即闔閭之所築周四十七里　陸門八　以象天八風　水門八　以象八卦城

2　中有水城　周十二里　第四句　舘娃宮　々在峴山　蓋以西施 得 名見于方輿二　又案蘇州志四十三　採香山之傍

3　水溪也　呉王種香於香山　使美人泛舟於溪　以採香今自灵岩山望之　一水直如矢　故俗又名箭涇也【溪（溪）】【灵（霊）】

4　樵本曰　春色云々　二句言　呉王使西施采香之地　今無其人　唯有春色似憐其地　而先發花也　蓋呉王闘草地則多異

5　花灵草　先占春也

6　和云　雨壊荒城草接空　海棠依旧發春紅　金臺玉砌無遺跡　流水依然遶故宮

7　江南意　本集云　閨怨　此詩凡借［二］怨女（ノ）之情（ヲ）［一］　以謂［二］于鵠不［一］［レ］用［レ］時也　或

集此-題ヲ 作［二］閨情ト ［一］ 次ノ閑情ヲ 作［二］江南意ト ［一］【この行まで数行間「江南意」原典テキストが置かれている。なお、抄文（二五〇8）で示されるように、この詩題とその次の詩の題は上下顛倒している。後にほぼ同様の指摘の抄文（二五三1）が見える】

8 家法集之次 或文字舛誤矣 村云 此題与［二］次詩ノ題 与［二］次詩ノ題［一］ 上-下顛-倒也 閑■情ハ 或作［二］閨情ト ［一］【「悶」某字見せ消、右傍に「ヒ」。「閑情ハ 或作［二］閨情ト ［一］」にすべき】

9 桃抄云 江南意ハ 在［二］江南［一］述［二］我意［一］也 題ハ カワルトモ ミエヌソ 補云 唐詩正音所［レ］載之題 如［二］此集［一］也

10 續翠云 江南意乃曲名也 題ニハ 不［レ］可［レ］出［レ］之 補云 江南 意ノハ 竹枝詞之類也 雖［レ］然訓為［二］江南之意［一］ 可也

11 履歴 于鵠 大歴貞元間詩人也 為諸府従-事 居江湖間 嘗自述曰 三十無名客 空山獨卧秋 豈一時窮者耶【「歴」左傍に「ヒ」、右傍に「暦」。「大暦」にすべき】

12 才子傳曰 鵠 初買山於漢陽高隠 三十猶未成名云々才子傳四

13 閑向——詩格 閑作悶 □作閑 語作説 詩格 采蘋所-以［レ］敬［レ］神也 与［二］闘草穿花者［一］不同 閑字便有［レ］意 ト［二］夫【□不*辶（還）】

14 婿之皈期［一］ 己所［二］独知［一］ 人所［レ］不［レ］知 多-少ソ怨思

二五一

1 續翠云 婦在江南 夫在此方 餘ニ 夫ヲ 思ホトニシカ子テ 神ヘ マイル 賽字ハ 妙ノ至極也 夢ニ吉事ヲ見欤 又得書信欤

2 シタ レトモ □マコトヲ シラヌホトニ 先賽［二］江神［一］也 女伴トモワ 夫ハ 目出度可［レ］帰ト云也 乍［レ］去 分明ニ 心ニハ 可帰トハ 不思トモ先

3 擲銭占之也 採蘋花ハ 我心ハ 無□閑ヲ 夫ニ シラセンタメ也 君ニ喩也【「ハ」右傍に「ノ」。「我心ノ」】

4 渊云 賽字ハ 所願成就シテ 其謝ニ 祭ヲ 云也此女ハ 思コト 雖［レ］不［レ］叶 随［レ］衆而行 サ

レトモ　衆中テワ　不［レ］語シテ　ソト

5　ウラフシタソ　于鵠意也　皆々所■ヲ　得ホトニ　伊勢ヘモ　入幡ヘモ　詣也【「領」字は墨汚れのためか、右傍に「領」とある。「所領」にすべき】

6　雪樵本曰　間向云々　二句言　女之望夫者　向江神以祈其速皈　苟有應報　則必祭之　今不得其報者　亦随女

7　伴之後　健羨可知　故閑来白蘋之語有味　詩云　采々巻耳　不盈傾筐　凡心有所思　則作事不専　今所下

8　之閑字　亦此意也

9　樵本曰　衆中云々二句言　黙禱之報不可測　故羞蘋□　擲金銭卜皈期也　案開元別記云　明皇与妃子在【禱（祷）】【□は「耳」か。「了」のように見える】

10　花蕚樹下　以金銭遠近為限　賽其無擲于地者　以金觥賞之【蕚（萼）】

11　樵本曰　又天寶遺叟云　内庭妃嬪　毎至春時　各於禁中結伴　金銭為□【寶（宝）】【□「虍*戈」（戯）】

12　村云　閑字作閟　偶不可也　閑字可也　毛詩巻耳采々巻耳　不盈傾筐トハ　夫出在外ホトニ　我心モ　此ニ

13　アラハヤ　故采巻耳トモ　不盈也　閑字意　在茲也還字ハ　又字ノ義也　吾願（カハ）　不［レ］遂トモ　人ニツレラレテ　マイル也

14　村又云　閑字ハ　イタツラニ　江□ニ　手ナクサミニ　採蘋　女伴ヲ　サソウテ　神ニ　スヽムルソ　夫ノ早帰ヤウニト　祈ル也　賽字ハ【□「力*辶」（辺）】

15　今ハ　神ニ　祈ルマテ也　所願成就ヲ　謝スル心テハ　ナイソ【「ル」「マ」間に挿入符あり、右傍に「心」。「祈ル心マテ」にすべき】

16　桃云　閑字ハ　シツカニト　讀モ　イタツラニトヨムモ　不［レ］當ソ　只イタツラト　シツカトノ　間ヲ兼テ　モツ字也　夫戍辺塞

17　未帰　サテモアルヘキ叟ナラネ■ハ　祈神カ　イサ不知　イタツラ叟テ　アルカト　疑ホトニ　先ツ　占（ウラナイ）ヲ　シタレハ　目出度ホト【「テ」「モ」間に挿入符あり、右傍に「シ」。「サテシモ」にすべき】【「テ」某字墨消し】

18　ニ　又再祭也　賽字ハ　重テ　祭ル心也　■愚謂採蘋祭神トモ　真実夫可帰ヲ　不知ホトニ　マメニモナイ　イソカシモ　セス　サテ　閑ニ採也【「禺」某字見せ消】

19　幻謂　女ノ心中ハ　雖忙众中ニテ　不語シテ　語ヲモ　不思ノ　カヲヽ　スルホトニ　閑ニ　採蘋也　葉苔磯閨怨詩　長安遊子【众（衆）】

20　誤帰期　懶織回文錦字詩　約臂黄金寛一寸　逢人猶

道不相思　意類之

21　暗擲金錢　開元遺叟云　内庭嬪妃　毎至春時　各於禁中結伴三人至五人　擲金錢為戯　盖孤悶無所遣也

二五二

1　又云　明皇未得妃子　宮中嬪妃　輩　投金錢賭侍帝寝以親者為勝　召入妃子　遂罷此戯

2　事文前集三十八　京房ト易卦以錢擲　以甲子赴卦

3　桃抄　江南意　或説ニ　是題カ　前後スルナリ　次詩閑情ト云ハ　此詩ノ題也　編時ノ　アヤマリト云カ　何ニ拠テ云　ヤラウソ

4　閑字カ　一番ニ　在ルホトニ　云乎　其ナラハ　ヲカシイ叟也　只江南テノ　我意ヲ　作ルマテソ　別シテチカウタトモ　不［レ］見

5　ソ　チツト　メツラシイ　題也

6　間向――閑字ハ　シツカニト　讀モ　不［レ］當ラ　イタツラニトヨムモ　不［レ］當ソ　只イタツラト　シツカトノ　間ヲ　兼テ　モツ

7　字ソ　簡用ノ心ヲ　モツ字也　全蕭婦カ　夫（ヲットヲ）　思テ作タ詩也　吾カ夫ハ　辺塞ニ　戍役ニ　イツテ　アルカ死ダ

8　ヤラウ　又イキタヤラウ　サテ　帰ラウスヤラウ　皈ルマイヤラウ　不知ソ　サレトモ　何様　先ツ　夫カ早ク　帰ル様ニト　神ニ【「マ」「イ」間右傍に「シ」。「マシイ」にすべき】

9　祈ルソ　サテシモ　アルヘキ叟ナラネハソ　サテ　カウ祈ルガ　イサ不知　イタツラ叟テアルヤト　疑ホトニ先占（ウラ）ヲ　トシテ

10　アレハ　メデタキホトニ　又再祭ルナリ　故ニ　賽字ハ　再重シテ　祭ル心也　サテ　賽（カエリマウシス）　トヨム也吾カ中心ヲ　以テ　明ニ　神ニマウ

11　ス　我心ニモ　イタツラ　叟ヲ　スルトハ　思ヘトモ　ヒトナミ／＼ニ　女伴ニ　随テ　行テ　神ニ　マウスソ　随女伴ト云カ　面白ソ

12　愚謂　江辺　三　白蘋ヲトルハ　何ノ用ト　ナレハ夫ノ　帰ランコトニ　神ニ　申スホトニ　可羞タメニ採レトモ　真實可【實（実）】

13　帰ヲモ　不知ホトニ　マメニモナレ　イソカレモセス　サテ　間ニ　採ソ　衆女トモハ　神ニ　祈ルコノカナヘハコソ　賽ワ　スルラウ【「コ」「ノ」間に挿入符あり、右傍に「ト」。「祈ルコトノ」にすべき】

14　我ハ　一ツモ　叶タト　思フ叟モ　ナケトモ　伴タチノ　女房トモカ　マイリテ　賽スルホトニ　ツレタツ

タテ　マイルマテソ

15　衆中――女伴ノ　多キ　中テハ　何叟トハ　ハツカシサニ　不言シテ　何叟ト　ナウ　只　ウワノ　空ノヤウニ　擲［レ］銭ヲ　マチウト

16　ハ　可帰欤　不可皈欤トシテ　見ルソ　是ホトニ　節義ヲ　守テワ　ヨク　思フトハ　夫ハ　ヤワヤ　思フ言ハ　于鵠ハ　我ハ　用ラ【節（節）】

17　ルヘキ　才モアリ　君ニ　忠アル　叟モ　随分ト思ヘトモ　天子ハ　ナニトカ　ヲホシメスラウ　未登用モ　セラレスソ　江南ノ意ヲ　説尽ソ

18　擲金銭　■以銭三文ト之　二文為［レ］面ハ　吉也一文為肖ハ　凶也【「日」某字見せ消】

19　和云　處々春風起緑蘋　汀花岸草捻傷神　蒲帆帯雨滄洲外　便是江湖一散人子／安【捻（総）】

二五三

1　雪樵本曰　或曰　前詩江南意　此蒿題也　是則前蒿題也　閑或作閨　見于本集【この行まで数行間「閑情」原典テキストが置かれている】

2　樵本曰　山上云々　二句言　山上有山　則出字也　雖然未皈　在湘江之滸　却其聞鷓鴣之鳴　行不得　不帰哉鷓

3　鴣　行不得　盖不得行而随夫之意也

4　閑情　閑一作閨　江南作也　唐音遺響　閑情作閨情不得作未得　唐音全部不［レ］載［二］于鵠江南意詩［一］

5　養按　韵府　頭字注　引此古樂府　藁砧今何在　山上更有山　何時大刀頭　破鏡飛上天　注　謂夫還

6　期　在月如破鏡時　刀頭有環　故云　韵府　砧字注曰砧　砆也　言夫　又曰　砧　搗衣石也

7　山上有――注古樂府　藁砧何処去　山上更安山　何當大刀頭　破鏡飛上天　砆砧　喩夫也　山上山　出也　刀頭【「何処去」右傍に「今何在」】【「當」右上に「ヒ」、右傍に「時」。「何時大刀頭」にすべき】

8　有環　言還　破鏡　月半也　幻謂　藁砧　ワラヲ　打ツ　アテノ石ヲ　砧ト云也　砆字去石　則夫也【「砧」右下に「砆」。「砧砆ト云也」にすべき】

9　一二之句　表面言　夫隔［二］重山複水［一］　而不［レ］得［レ］帰也　■婦在［二］湘江［一］也　暮雨鷓鴣_飛_時　其情難［レ］忍也　湘江二【「莫」某字見せ消】

10　妃泣［レ］竹　三_閭懐［レ］沙以来　愁人之所居也裏意　一之句言　夫_出而不［レ］皈　夫行不得也【「夫行不得也」後に小文字書きで、「恐夫字帰字也」とある】

11　山上有山――村義ニ　此詩ハ　樂府ノ体也　皆句中ニ　隠字ヲ作也　桃云　此詩モ　全蒿婦カ　夫ヲ思也

吾カ　夫ハ

12　山又山ヲ　ウチコエテ　一ヒ　役ニ　イテタカ　未
［レ］皈也　帰ル叟カ　遅ソ　カヽル折節　イトヽ　コイ
シキ人ハ　不来シテ　悲キニ　湘江暮【遅（遅）】

二五四

1　ホトニ　小雨フリテ　啼ヶ鳥ハ　何ソト云ヘハ　鷓鴣
カ　只モ　不鳴シテ　行不得哥々　啼ソ　村云　夫カ
恋シキカ　殊ニ　恋

2　シキ時分ハ　湘江邊ニ　暮雨冷クテ　鷓鴣モ　物スコ
ク鳴飛■時分ニ　殊ニ　コイシキ也　下ニハ　行不得ノ
字ヲ　隠ス也【「此」字見せ消】

3　桃抄　此篇　婦想［レ］夫　第二之句　飛字ニ　無意
只啼字ノ心也　彷彿千声一度飛ノ心ト　同也　言ハ　我
モ　夫ノ処ヘ　行

4　タケレトモ　女ノ身ナレハ　カナワヌニ　鷓鴣カ　行
不得ト　啼ケハ　猶カナシイソ　愚意不然ソ　夫ハ帰ル
狄ミ／＼ト待

5　トモ　遅キニ　何ソ　イマ井マシク　鷓鴣ノ　行不得
ト　啼キ　叟ハ　□ツケテモ　カナシイソ　鷓鴣ノ叟ヲ
考ルニ　埤雅等【「イマ井マシク」、「井」字は「イ」】

6　ニモ　サウナウ　不飛者ト　見エタソ　一処ニ　居テ
啼者ソ　然則　イカナレハ　アノ一生　行不得ト　啼テ
不飛鳥タニモ　有時

7　飛ニ　吾カ夫ハ　サモアレ　不皈者カナト　云心モ
アラウ狄　其ナラハ　飛字　一倍面白ソ

8　鷓鴣飛之飛字　見李義山寳友對等詩　遺響　李義山賛
李衛公云　今日致身歌舞地　木綿花發鷓

9　鴣飛　遺響　寳友對詩　日暮東風春草緑　鷓鴣□上越
王臺【□「飛」字の異体。中の「升」のない字と見える】

10　蘼蕪――本草七云　蘼蕪　香草　魏武帝以蔵衣中
又芎藭　一名胡窮　一名香果　其葉名蘼蕪　一名薇

11　蕪　一名茳蘺　芎藭　苗也　又七　蛇床子　一名虺
床　一名牆蘼

12　全芳備祖三云　牛亭問曰　将離　贈之以芍薬者　何
荅曰　芍薬　一名将離　故将別以贈之　亦猶相招召　贈
以蘼蕪　々々【荅（答）】

13　一名當帰本草注

14　百川学海甲集中　馬縞中華古今注巻中　牛亭問曰
将離相贈与芍薬　一名可離　故曰相贈与芍薬　相招【「牛
亭」右傍に書き入れ「寫本如此　全芳備祖　亭作亭」とあ
る】

15　召則以文無　々々　一名當帰也　史記司馬相如傳子虚
／賦云　江離■糜蕪　注　駰案　漢書書義曰　江離ハ　香

草【「靡」字見せ消】【虚（虚）】

16 ■□蕪　蘄芷也　似蛇床而香云々　索隠曰　呉録曰　臨海縣開水ノ中ニ生　江離　正青似乱髪　即離騒所云者是也【「麻」某字見せ消】【縣（県）】【□「サ+麋」。以下数箇所にこの字を用いているが、ユニコードにないため、すべて「蘼」に改めた】

17 廣志云　赤葉紅蕚　則与張勃所説又別　案　今芎藭苗曰江離　緑葉白蕚　又不同　樊■曰　藁本一名蘼【某字見せ消、右傍に「光」。「樊光」にすべき】

18 蕪　根名蘄芷　薬對以為蘼蕪　一名江離　芎藭苗也　則芎藭苗也　則芎藭　藁本　江離　蘼蕪　並相似

19 備　是一物也

20 樵本曰　蘼蕪云々二句言　古樂府詩云　上山采蘼蕪　下山逢故夫　今則不然　而似王孫不帰草　不可敢送春香也

21 樵本曰　楚詞九歌云　秋蘭蘼蕪　羅生兮堂下　緑葉兮素枝　芳■菲々兮襲予　□蘼蕪芎藭

二五五

1 蓋詩意　蘼蕪　屈原所詠之草　故不欲■春香也【某字見せ消、右傍に「聞」。「聞春香也」にすべき】

2 樵本曰　尓雅云　紅龍古　其大者□　通作帰　本草當帰　一名乾帰　一名文無　古今注　将帰　贈以文無通【尓（爾）】

3 志云　葉似穹窮　大葉曰馬尾當帰　細葉曰蠶頭當帰【「穹窮」は「芎藭」か。明汪刻本・宋鄭樵『通志略』昆虫草木略第一（『国学宝典』による）において「葉似芎藭有両種　大葉者謂之馬尾當帰……」とほぼ同文のものが見える】【蠶（蚕）】

4 樵本曰　埤雅云　蘼蕪　一名江□　似蛇床而香　記論曰　夫乱人者　若芎藭之与藁本　蛇床之蘼蕪　是【□「サ+离」（離）】

5 也　使人相去也　若玉之与石　葵之与莧　則論人易矣　故曰大聖之与大佞　難知也　是故周公忠勤而被流【垂（聖）】

6 言　王莽折節以致虚□　王孫草　案図経本草云　王孫草　呉名白功　楚名王孫　斉名長孫　一名黄【□「文+言（誉）】

7 孫　一名黄昏　一名海孫　生海西川谷及海南城郭垣下【海南」は「汝南」か。味古斎重校刻本・明李時珍『本草綱目』草部第十二巻（『国学宝典』による）においてほぼ同文で、「汝南城郭」とある】【昏（昏）】

8 樵曰　芎藭　江离也　一名蘼蕪　樵本曰　或曰　崔魯胸中必有不平之叟　寓之於詩欤　案崔魯酔【「樵」「曰」間に挿入符あり、右傍に「本」。「樵本曰」にすべき】【离

（離）】

9　辱陸肱郎中　且日為詩謝云　醉時顛蹶醒時羞　麴蘖催人不由自　叵耐一双窮相眼　不堪花卉在【「不」「由」間に挿入符あり、「自」右上に顛倒符ある。「不自由」にすべき】

10　前頭　蓋有酒失　則不平之事　可知也

11　養按　坡詩　顧注曰　孫盛雑語　姜維詣諸葛亮　与母相失　後得母書　令求當帰　維曰　良田千

12　頃　不在一■畝　但有遠志　不在當帰【「略」某字見せ消】【但（但）】

13　又韵會　蘺字注　前相如傳　江離蘼蕪云々　尒雅翼云　■物志謂芎藭苗　曰江離　根曰蘼蕪　本卩【「博」字見せ消、右傍に「博」。「博物志」にすべき】

14　亦云　芎藭有二種　一種似芹　一種如蛇床　然則小葉如蛇床者　蘼蕪　大葉似芹者　當名江離尒

15　注　招隠士者　淮南小山之所作也　■閔傷屈原也原与楚同姓　故曰王孫也　游（シテ）兮不［レ］帰（トハ）　違背旧都弃【「王」某字見せ消】

16　室家之謂也　春草生（トハ）　万物蠢動　抽萌芽也

17　王孫草　本草　王孫　呉名白功草　楚名王孫　斉名長孫　一名黄孫　一名海孫　一名蔓延　一名黄昏

18　幻謂　王孫草　用招隠辭耳【辭（辞）】

19　蘼蕪――桃云　蘼蕪　當帰草也　アワレ　吾カ夫ノ當（ニ）帰ルカ　不［レ］皈ハ　此當帰草モ　亦不帰草ニテ

20　ハシアル欤　サラハ　カマイテ　此草ノ　春ヲハ吾夫ノ　衣ニハ　入レンメマイソ　イトヽ　不帰モノニト　云心ソ

21　王孫草ハ　不帰草也

二五六

1　續翠云　此詩蔵頭格也　蓋効古樂府躰也　第一句蔵出一字　第二句蔵行不得三字　第三蔵當帰

2　二字也　アラワニ　云ヘハ　ハツカシサニ　如此作也蘼――吾夫モ　不帰ニ　此草カ　又茁テタ　叟ヨ

3　村□云　不得帰ト　作テ　韻ニ　不押帰字ハ　韵律ニ不■叶欤　聴雨義（ニハ）　不得帰トスレハ　声カ　ワル【「味」某字見せ消】【□「言*云+冄」（講）】

4　イソ　平聲一字アル也　莫送――夫ハ　物アヤカリスルニ　勿レ送春香入夫衣也【聲（声）】

5　一義ニ　莫（ナシヤ）送――（ノ）点也　言（ハ）　夫不帰ホトニ　サテハ　一□吹送春香入衣タケナソ　此点不可也【□「宀+之」（定）】

6 補云 帰不得ハ 帰字ヲ 韵ニ 不押ハ 樂府ニテ
アルホトニト 云義モ アルソ 蘼蕪―― 一初詩 野
草
7 無■端亦姓刘之□也【「物」某字見せ消】【□「生*丸
+力」（勢）】
8 蘼蕪――村云 是ホトマテトモ 不■様ハ 此湘江ノ
辺ニ 蘼蕪トテ 當帰トモ 云草アリ 當[レ]歸ル【「思」
某字見せ消、右傍に「帰」。「不帰様ハ」にすべき】
9 ト アレトモ 其帰モ 王孫草ト 云イシ 草ニハシ
成リタカ 招隠ニ云 王孫游(シテ) 不[レ]皈ト 云草ニテ
アリケ【「其」「帰」間に挿入符あり、右傍に「當」。「其
當帰」にすべき】
10 ナヨト 激シテ云也 夫ハ 物アヤカリヲ スルモ
ノ也 其王孫草ノ 不歸ノ草ノ 春香ヲハシ 我カ夫ノ
客裡ニテ イタル 客
11 衣ニハシ カマイテ イレナ也 アラウト マシノ
王孫草ヤ 名モ イヤナリ 不祥ノ草ト 云心也
12 一説云 蘼蕪――莫(シヤ) [下]送[二]春香[一]入(コト)
[中]客衣(ニ) [上] 言ハ イマノ 夫ノ(ヲ) 不帰□ハ ハヤ
王孫草ノ 春香ヲ 送テ 夫ノ
13 客衣ニ 入タ者也 王孫ニ アヤカリタル欤 前説
妙也 桃云 此蘼蕪ト 出シヤウモ チツト 突兀トシ
タソ
14 是レハ 一名江蘺ト云ソ 江離トモ 書ソ 江离ハ
香草也 楚辞ニモ 詠シタ モノナレハ 湘江ノ辺ニ
有モノナリ
15 眼前底テ 出テ 面白ケレソ 此蘼蕪ハ 當帰ト
云ヘハ 名モ ナツカシキ 草ナルガ 何(ナ)モ ショウハ
吾夫ハ 不帰
16 ホトニ 此草ハ 虚名テ アル也 招隠士ニ 王孫
■游(シテ) 兮不皈 春香生(ヲイテ) 凄々ト 云タ 其王孫ノ 不帰
シテ 不[レ]帰ル草【「草」字見せ消】
17 テアリケナソ 當帰テハ アルマイソ 王孫草テ
アルナラハ カマイテ 其ノ 春香ヲ 吾カ夫ノ 衣ニ
ハ 入レシメマイソト
18 見タカ ヨイケナソ 村云 注引古樂府云 藁ノ砧
トハ キヌタヤ ヌワラヤ 打ツ アテノ 石ヲ 砧ト
云也 其石ヘンヲ ノク
19 レハ 夫ノ字也 夫トハ 女ノヲトコ也 隠シ字ニ
云也 夫ハ 何ノ処ニカ 去ルラント 云心也 一ビ
出テヽ 不[レ]皈也 山上有山

20　ハ　出也　□大刀頭ハ　刀ノ環也　還ト　云字ノ音同シ　還ル也　何當［二］大刀頭［一］ト　云テ　イツカ還ランスラウウト　云義也

21　破鏡飛上天　半月也　月ノ十五日辺ニ　歸ラウト云心ニ　云ソ　又　廿日以後ヲ　云欤　皆如此字ヲ　隠シテ　作也【廿（二十）】

二五七

1　雪樵本曰　鷓鴣自呼其名　常向日而飛　々数随月　蓋各正日一飛而上　畏霜露　早晩稀出　有時【「鷓鴣自呼其名」より二五七4末尾まで漢籍にそれぞれほぼ同文のものがある。「鷓鴣自呼其名……自覆其背」は、四部叢刊影宋本・西晋崔豹『古今注』巻中鳥獣第四（『国学宝典』による）においてほぼ同文である】

2　夜飛　則以木葉自覆其背　古銭云　偃鼠飯河　止於満腹　鷓鴣銜葉　才能覆身　此之【古銭」は「古践」か。「古銭云……才能復身」は、「通行本・清李慈銘『越縵堂読書書記』）において「然埤雅引古践云　偃鼠飯河……才能復身」（『国学宝典』による）とあり、ほぼ同文である】

3　謂也　多對啼　志常在　嚮南　不思北徂　雖東西回翔然間翅之始　必先南翥　亦胡馬嘶北【「間翅」は「開翅」か。筆記本小説大観本・宋李昉『太平廣記』巻46禽鳥二において「然開翅之始」（『国学宝典』による）とある）

4　之義也　鷓鴣出南越　其鳴自呼　常南飛不北

5　和云　欲進竿頭百尺機　天涯思遍夢□飛　何如収拾閑風月　帰著来時旧布衣【□「云+鬼」（魂）】

6　曲江春草　呂居仁為一意格　此詩鄭谷七歳作　幻謂未見出處　又出何書　才子傳　父史　開城中為【この行まで数行間「曲江春草」原典テキストが置かれている】

7　永州刺史　鄭谷鄭谷幼頴悟絶倫　七歳能詩　司空侍郎■図与史同院　見而奇之　問曰　予詩有病否　曰大【「國」某字見せ消】【奇（奇）】

8　夫曲江晩望云　村南斜日閑廻看　一對鴛鴦落渡頭　此意深矣　図拊谷背曰　當為一代風騒主也【廻（廻）】

9　事物紀原第三　開宝八年　賜新及第進士王嗣宗等銭百千　令宴樂　太平興国二年正月七日　太宗

10　親試呂蒙正以下　並賜及弟　仍賜宴開宝寺　兼降御製詩二首　賜之　此賜宴及詩之始也　唐制礼

11　部放牓後　勅下之日　醵銭于曲江為聞嘉宴　近代多於名園佛廟　至是官為供帳　為盛集□□

12　景德二年　始賜宴於瓊林苑　自此為定制　按李肇國史補云　曲江大會　此為下第挙人　其筵

二五八

1　簡率　此之幕天席地　□来漸加侈靡　皆為上列所拠向之下第挙人　不復預矣　摭言曰　曲江攟遊賞　雖【□

「人+小」（尓・爾）】

2 云自神龍已来　然盛於開元之末　今瓊林賜宴　亦唐曲江杏園之事尓

3 本集　雲臺編上載之　遊人作愁人　鄭谷雲臺編曲江詩云　細草岸西東　酒旗揺水風

4 花落――江或乍平　草色或江色【「或」「江」間に挿入符あり、文末に「作」、右上に顛倒符ある。「草色或作江色」にすべき】

5 樵本曰　落花云々二句言　江隄暖烟　乃春草長而烟色簇也　然遠相連之意　蓋伴遊人之酔眠也【「曰」「落」間に挿入符あり、「花」右上に「転倒符」ある。「花落云々」にすべき】

6 花落――続翠云　曲江ハ　官人ノ　遊処也　三月ノ末ニ　初テ　花カ　落カト　思タレハ　ヤカテ　草茁テ　復ノ　氣ニ　成ル也【氣（気）】

7 述懐至極ノ　餘ニ　時人ニ　向テ　云タ　セメテ　此草ヲ　不碾破シテ　我カ　様ナル　時ニ　アワヌ者ニ　アタエテ　遊ハセヨ　遊人

8 自□□□高位［一］受［二］厚禄［一］之人コソ　香輪テ　ソヽメカシメ　我等カ　様ナル者ハ　梅檀閣　玳瑇筵ハ　カナワス　セメテ

9 青草如茵トモ　思テ　可坐也　桃云　花落後暖烟簇者　何哉　即草色　然則一之句　亦詠［二］春草［一］　何

■謂［二］之断頭躰［一］哉【「然」字書きかけ、見せ消。右上に「必」。「何必」にすべき】

10 曲江　村云　此ノ曲江ト云フハ　人ノ遊フ処也　花落尽キテ　後ハ　又蹈青ナントヽ　云テ　愛草色也　此曲江ニハ　花ハ　ハヤ

11 落チツ　暖烟カ　アソコマヽニ　簇カツテ　草ヤウ／／　ヲヘサウニ　成ル也　サルホトニ　雨カ　サツトフリタレハ　草色相連

12 テ　ウツクシク　ヲユル　サテ　三四ノ句■心ハ時ノ　大名　冨貴ノ人タチヨ　輿車ニテ　遊トテ　此ノ青々ヲ　コクリ破テ【「ヲ」字見せ消、右傍に「ノ」。「三四ノ句ノ心」にすべき】

13 バシノケ　サシムナ　チツト　残テ　置テ　如［二］我等カ［一］　貧ナル遊人ニ　アタヘテ　其ノ　シハノ上ニテ　一酔眠サセテ　タバシメ也　時ノ

14 少年ヲ　サシテ　云ソ　三四ハ　谷カ　失［レ］志者也　チツト　鼻ニ　ノセテ　云ソ

15 花落――草ノ　ヲエ出サウナル　景キヲ　云也　暖烟ノ　蒙々トシテ　ノト／／トシタ　サテ　雨カ　一フリフツタレハ　青々ト

16 ヲエ出タ　香輪――王子王孫トモカ　新草ヲ　蹈ミニシツテ　トヲルヲ　辞ヲ　カケタソ　美ナル　新草ヲ

独我

17　物ニハ　サシムソ　小シ　残シテ　置テ　我レラニ
ヒルイ子ヲ　サセラレヨ　ヘンシユシテ　云タ

18　和云　風揺緑柳水浮烟　嬾草如茵断復連　江畔遊人
歓賞罷　横坡高処枕樽眠

二五九

1　山路見花　才子傳　崔魯　或作櫓　廣明間挙進士　工
為雑文　才麗而蕩　詩慕杜紫微風範　警【この行まで「山
路見花」原典テキストが置かれている】

2　句絶多　如梅花云　強半瘦因前夜雪　数枝愁向晩来天
云々

3　樵本曰　暁紅――全篇言　山花無主　故暁紅自折露凝
香而已　崔魯偶見之　以冷咲世間桃李也　然此花

4　亦知無人惜　而恣飄零也　松花以恣字　不属于風也

5　愚案　文式云　上一下六成聯　掖垣竹埤ノ梧十尋
是　今所用之恣字　此類乎【「是」「今」間に挿入符あり、
右傍に「也」。「掖垣ノ竹埤ノ梧十尋　是也」にすべき】

6　樵本曰　恣風――乃折句法也　所謂三字四字　欧陽公
詩　静愛竹時来野寺　獨尋春偶過溪

7　橋　又盧贇元雪詩云　想行客過梅■滑　免老農憂麦□
乾【「梅」字見せ消、右傍に「橋」。「梅橋滑」にすべき】
【□「β*竜」（隴）】

8　暁紅――桃抄云　一之句カラ　時ニ　不用者ト　見ヘ
タソ　山路ニテ　花ノ暁ツホウタカ　イツノ間ニ　ヒラ
ケタヤラウト

9　云ヤウナモノチヤソ　此ハ　暁カラ　用ハ　ナシ　山
路ヲ　セヽリアルクホトニ　閑ニ　花ノ　開ヲ　見タソ
山路チヤホトニ　人ノ　賞翫

10　モ　セヌ花カ　イクラモ　ヤス／＼ト　軽折也　軽
字　妙也　卒然トシテ　開ル也　慈氏ハ　軽折（クヲツテ）ト　ア
ソハスソ　獨立ハ　或云　花

11　カ　空山ニ　獨立シテ　春ヲ　冷咲シテ　シフ苦（ニカ）ク
咲タソ　凡春ハ　物ニ　私ハ　ナイ者チヤカ　春モ　亦
私スルカナトテ　春ヲ

12　冷咲スル也　慈氏ノ　折（ヲツテ）ノ　心ハ　山路ニテ　主
モ　ナク　又　路ハタニテアル程ニ　タヤスク　軽／＼
ト　折リモチタレハ　露香カ　故

13　ニ　新也　春意――春ノ意モ　此花ハ　山路ニ　在
テ　主モ　ナシ　惜モ　ナイト　知タホトニ　ヤラウ
風吹タイヤウニ

14 恣ニ 吹チラシタヨ 自知トハ 春ノ 意ニ 自知也 又 恣(ニシテ) [レ]風(ヲ)吹(テ) ――ノ点也 言ハ 花モ春ヲ 不肯シテ 冷笑スルホトニ 春

15 モ サラハ サテ アレカシトテモ 主カ アリテ惜トモ 不思チヤホトニ 風ヲ 恣ニシテ ニクサモニクシ 思ホト 吹テ 吹落テ 成[二]馬

二六〇

1 蹄塵也 又ハ 恣風トヨマウト 云義モ アルソ恣(ホシイマヽ) ナル 風ソ 狂風 悪風 大風ナントノ 心ソ其時ハ 風マテヽ 春ノ ワサマテハ イカヌ

2 ソ アレトモ 恣風ノ 吹コソ 春ノ ワサヨ ナレハ 同モノソ 同ハ 春カ 恣(ニシテ) [レ]風(ヲ) 放テ 吹カセタカ 面白ソ

3 続翠云 暁 [レ]紅軽折(ヒラケテ) ――春意自知(ルカ) 恣(ニス) [下]風吹逐(コトヲ) [中]馬蹄塵(ヲ) [上] 欧陽折句体ト 同也乾咲ハ ツイセウニ 咲也 冷笑

4 ハ ヘンシユシテ 吹也 春モ 我ニハ 三セント(ミ)思フ 心ワ ナキヤラン 思フホト 風ニ 花落也 花ハ 我賞翫ヲハ 不可受ト 思タケナリ

5 玉屑第三 折句 六一居士詩云 静 愛(ニ) [レ]竹(テ) 時(ヲ)来[二]野寺(ニ) [一] 獨尋[レ]春(ヲタ) 偶過(ク) [二]溪橋(ヲ) [一] 俗謂[二]之折句(ト) [一] 盧贄元(カノニ) 雪 詩 6 想(ヲモウ) [三]行客過(コトヲ) [二]梅橋(ノナメラカナルヲ) 滑 [一] 免(シム) [三]老農憂(コトヲ) [二]麥□乾(クヲ) [一] 校[二]此(ノニ) 格 [一]也 余亦嘗云 鸚鵡杯(ニハ) 且酌[二]清濁[一] 麒麟閣(ニハ) 懶[レ]畫[二]丹【麥(麦)】【□「土※竜」(壟)】【乾(乾)】

7 青[一] 漁隱

8 渊点 恣(ニシテ) [レ]風(ヲ) ―― 軽折(ヒラケテ) 補云 華山作也 花雖在山路 不減上苑 賞之内ニ 無興ナ叟カ 出

來テ　ニガ咲ヲ　スル【「折（ヒラケテ）」字左傍に「ヲレテ」とある】【減（減）】【來（来）】

9　ソ　アサ咲也　聽雨云　此花ワ　吾御■影ヲ　畫出スヤウ也　不遇於時ワ　能似我也【「縣」某字見せ消】

10　観中　聽雨ノ点ハ　恣（ニ）風吹（テ）——也　恣（ニシテ）［レ］風吹（ヲテ）——ノ点　可也　花ハ　人モ　不［レ］見ホトニ風ノ吹落ワ　マシヨト　心得也　言ハ　我身モ

11　コチノマヽ　山林ニテ　ハツヘシト　思ヘハ　心安也　此義可也　太史公牛馬走ノヤウニ　馬鞭ヲ　可執ト思ト　云ワ　不可也

12　村云　一義云　冷咲春ハ　天不置此花於上苑　而置之於山路　實可冷咲也　一義云　花ハ　暫モ　所見者為主也　吾躰ニ

13　能似タト　思テ　欲賞之　則風吹落ハ　可咲者也又云　空華点　軽折（サケテ）也

14　毛韵云　坼　裂也　開也　周易　百果草木皆甲坼俗作拆

15　冷笑春　村云　白眼ト　云ヤウニ　春ヲ　ニク／＼ト　ニカリ笑ニ　咲也　其故ハ　此花ヲ　空山ニ　ヲイテ　主モ　ナケレハ　風思フマヽニ　吹落

16　サセテ　馬蹄ニ　フマスル　アラ　比興ノ　春ノアテカイヤ　恣（ニシテ）［二］風吹（ヲ）［一］点ノ時ハ　春意カ恣（ニシテ）［レ］風（ヲ）ニ　成ル也　是（レ）言才人不被用シテ

17　夷中ニテ　朽ハツル也　三四ノ句　君ハナニトモナラハ　ナレト　ヲホシメス心ヲ　云ソ　激昂也　続翠惜少年落飾語出咲春

18　意　無惜花之題　盖同村義者也　或義　恣（ニ）風吹（キヲ）［二］——塵（ヲ）［一］　上一字　下六字句法也　又義　上三字　下四字句法也　折句体也

19　独立　或云　杜秋雨嘆　凉風蕭々吹汝急　恐汝後時難獨立　盖謂決明花　然則此詩独立　亦謂花乎【決（決）】

20　或云　崔魯　獨立空山咲之　李白清平調　一枝紅－艶露凝香

21　和云　雨過山前草木新　花林数朶殿残春　可憐明日春帰去　半落蒼苔半逐塵【「新」「花」間に挿入符あり、「林」右上に転倒符ある。「林花数朶」にすべき】

二六一

已前共六首　雪本云　皆第三句喚第四句也

第三句　深入情思者　或第三句喚第四句者　用而軽多　又第三句　有怨意也

〈表1〉先に異体の文字を置き、その後の（　）の内に通行体を入れる。

醫（医）　韵（韻）　烟（煙）　渊（淵）　往（往）
華（華）　卧（臥）　會（会）　盖（蓋）　廻（廻）
蕚（萼）　乾（乾）　竒（奇）　氣（気）　弃（棄）
虚（虚）　亰（京）　溪（渓）　决（決）　縣（県）
減（減）　國（国）　昏（昏）　蠶（蚕）　尓（爾）
了（耳）　辭（辞）　實（実）　众（衆）　從（従）
嘗（嘗）　翆（翠）　垩（聖）　節（節）　屮（草）
續（続）　捻（総）　帶（帯）　臺（台）　但（但）
團（団）　遲（遅）　傳（伝）　覩（睹）　荅（答）
當（当）　禱（祷）　獨（独）　讀（読）　奈（奈）
發（発）　廢（廃）　麥（麦）　范（範）　冨（富）
覓（覓）　菰（篇）　皃（貌）　寶（宝）　无（無）
餘（余）　欠（歟）　來（来）　离（離）　刈（劉）
凉（涼）　灵（霊）
事・叟（事）　廿（二十）

〈表2〉行末の【　】中において、「米*口」（幽）や「「旡+舛」（舞）のように記す異体の文字の、その通行体すなわち（　）内の文字「幽」や「舞」を一覧した。

*印の類：幽　時　解　還　戯　聞　譏　辺　幕　様　壟
+印の類：受　愛　恩　携　魂　尓　寝　声　桃　寵　定
等　番　舞　蘼　夢　桃　誉　様　蘺

*印と+印の組み合わせた類：講　勢

〈表3〉表2のように工夫しても再現できなかった異体の文字の、その通行体を一覧した。ただ、操作困難なため、少数ユニコードには文字がないものも割愛した。

韻　隠　焉　回　懐　隔　巻　閑　還　機　歸　疑
就　挙　凶　興　胸　形　経　兼　彩　再　此　実
修　初　床　召　将　賞　寝　図　衰　雖　聖　説
鼠　喪　楚　第　段　嘆　土　置　廷　讀　独　範
晩　飛　微　暮　蒙　郵　覧　蘭　流　臨　留　龍
諒　麗　聯　路　魯

〈付記〉本稿は2016年度中華人民共和国国家社会科学基金項目資助（一般項目/項目号16BZW062）を得たものであり、その研究成果の一部とする。特記して感謝を申し上げる。

〈リュウ・レイ／北京師範大学外国語言文学学院　教授〉